

平成28年度 第2回学校評議員会 記録

I 日時 平成29年1月23日(月) 10:30~12:00

II 場所 本校第2会議室

III 出席者

学校評議員	A委員(進路先関係)	
	B委員(地域関係機関)	
	C委員(卒業生関係)	
	D委員(教育関係)	
	E委員(地域関係)	以上 5名
学校職員	校長 副校長2名 事務長 総括教務主任 幼稚部長	
	小学部長 中学部長 高等部長 寮務主任	以上10名

IV 評議員会

1 開会のことば 進行:副校長

2 校長挨拶

3 議題

(1) 今年度の学校運営について、各学部の取組、進路状況について

別紙資料のとおり 校長より説明

<A委員>進路状況について、幼稚部はどのようになるのか。

→<幼稚部長>今年度は年長児の在籍がないため小学部への入学者はなし。

(2) 平成28年度学校評価結果について

別紙資料のとおり 副校長より説明

(3) 意見交換・提言

【意見交換】

<A委員>全学年で「悩みがあるときに相談できる人がいますか」が低い評価である。最近また様々な問題によりどこかで子どもたちが命を絶ってしまったり、相談できなくて学校に行けなくなったりということが起きている。具体的にはどのような形で解決しようと思っているか。

→<幼稚部長>幼稚部では、保護者が毎日送迎をして授業の様子を見ている。そのほかに連絡帳でのやりとり、一日の出来事を帰りに詳しく話す、学期末ごとの面談、また、時期に関係なく必要があれば話す機会を設け保護者としてしっかり話をしている。内容によっては担任に限らず、学部長、支援担当と話してもらするなど、職員みんなが話すことができるようにし、職員間で共有するという形をとっている。

→<小学部長>小学生はまず親が近い相談相手である。「相談相手がいない」というのは友達との意思疎通・伝達と同等の数値で、友人に話が伝わりにくいという評価とリンクしていると思われる。本校の子どもたちは長い目で見ていく必要があり、言葉のやりとり、気持ちを伝え合うというところはきちんと支援し、子どもたちからの発信がなくても、起こった出来事などを捉えて職員の側から話題を持ちかけていくようにしたいと考えている。

→<中学部>寄宿舎生については、舎担と担任、保護者も含めて情報を共有し解決に向けて方針を立てたりしながら話し合いを密にもつようにしている。また、内容によってはスクールカウンセラーの先生に相談をするよう勧めることもある。

→<高等部>高等部になると生徒たちの悩みも多岐にわたり、大人には相談しにくい内容

であることも当然ある。スクールカウンセラーに相談にのってもらい、深刻な悩みであれば、場合によっては情報を共有したり支援の方法を考えたりということにも取り組んでいる。普段は担任が直接生徒と連絡帳をとおしてやりとりをするとか、保護者と連絡を取り合い、問題が長期化しないような配慮をしている。本校は少人数学級、一人学級のところもあり、生徒同士で悩みを話したり聞いたりということが非常に難しい環境下にある。フォローする意味でも、生徒の普段からの行動や様々な変化を注意深く見守りながら声がけをするなどして対応していきたい。

→<寮務主任>小学部から高等部まで全員で19名の舎生が、家を離れて共同生活をしている。コミュニケーションの方法は、手話がまだ分からない、口話だけの人、日本手話など様々である。そのような中、寄宿舎指導員が丁寧に話し相手になり悩みがあれば相談を受けている。伝える力、聞き取る力を向上する目的で、月に一回「アップルトーク」という場を設け、言いたいことをみんなに伝わるように話す、言っていることをきちんと聞く、ということに継続して取り組んでいる。その他に舎監の職員に話を聞いてもらうという舎生もいる。悩み事が学校と連携をとらなければならないようなことであれば情報を得て、寄宿舎と学校とで連携をとり問題解決に努めている。

<A委員>専門学校でも自分で悩みを抱えて話をすることができない学生、高校あるいは中学の時から悩みをそのままって専門学校に入ってくる学生もいる。せっかく別の社会に入ってきて、自分自身がそこから殻を抜けられず、去って行く学生も年に何人かいる。コミュニケーション力はとても大事で、しゃべること、人の話を聞くこと、キャッチする気持ちを育てておかないと就職してもやめてしまう。ハローワークもそうであるが、専門学校の中にも、わざわざ来て話をする学生が何人かいるので、話しやすい雰囲気をつくるのも大事であるが、それだけではなく、小さい頃から学校との連携がとても大事であると最近余計に感じる。子どもたちが個別化してきていて、いい雰囲気であらざるが実際はそうは思っていない。一人になると一人で悩んでしまっている。たぶん今の子どもたちは上手に隠したり、全部スマホで解決したりとか、これが逆の意味で大変になってきている。

<C委員>スクールカウンセラーについて

→<校長>県から派遣され今年度は4回来校。養護教諭が窓口となり、学校の職員に話せないような悩みを抱えている生徒は相談することもある。中高生が中心で毎回数名はいる。今年度は予算の関係で4回だけであり十分ではないという状況があるが、学校の職員に話せないことを相談できるので、生徒にとってはとても大事な人、キーパーソンになっている。

→<副校長>生徒だけではなく職員、保護者も希望があれば相談できることになっている。

<C委員>カウンセラーは予算的に難しいということがあるなら、進路相談員もいるし、聴覚障がい者の進路のことも相談できる。そのような方々も有効に使って相談した方がよい。

<C委員>先生の話聞いても分からないときがあるようだ。その対策はどうしているか。分からないままだと困るのではないか。

→<幼稚部長>幼稚部の子はまだたくさん話ができる段階ではないが、幼稚部職員が言ったことは分からないことがないように確かめている。分からないまま返事をさせることがないよう動作化や絵を描かせるなどして理解を促し確かめるようにしている。幼

児の実態を把握した上で理解を促すことができる話しかけを心掛けています。

→<小学部長>授業や全体の会の時には、できるだけ視覚教材を使って理解を深める努力をしている。授業や個々のやりとりで必要なときは、何をするのか、何と言ったのかなどこまめに確認しながら理解したかどうかを確かめるようにしている。

→<中学部長>直接、声、言葉がクリアに聞こえるような設備（ロジャー：補聴支援システム）を学校として用意した。内容的に分からないときには、筆記をして詳しく説明するように努力している。情報機器を活用する取り組みも行っていく。今後はタブレットを使用して授業に活かしていくという方向で、わかりやすい教材を準備していく。

→<高等部長>高等部になると各教科、科目とも専門的な用語が出てくる。板書やプリント、あるいは手話で伝えたりして理解を促すが、生徒たちはその場では分かったような素振りを見せるが、本当に理解しているかどうかをよく確認しながら進めていく必要がある。社会科を例にとれば、歴史的な用語は普通の読み方をしないものもあるので、指文字やルビをふったりしながら確認をして進めているが、試験問題で読みの間違いが見られたりする。本校は少人数のクラスなので、本当に分かったかどうかを確認しながら、できれば分かるまで教えていきたい。

<C委員>口話だけでは難しいと思うので、是非、手話を使って指導してほしい。

<E委員>これまで提案のあった改善策について保護者へは伝えるのか。

→<副校長>対応についてはまとめたものを後日伝える。

<D委員>保護者から「もっと運動させてほしい」との要望があるが、様々な行事のやりくり、特に今年度は国体関係の色々な行事など、取り組む時間がなかったと思う。小学校としては運動会の取り組み、全ての時間が体力的なものというわけではないが、交流学习として結構な時間数かかわらせてもらった。その中で負担というものはないのか。小学校までの往復の時間も難しかったり、常にバスが使えるという状況でもなかったり、全校であれば別であるが、その都度、学年に応じたスケジュールの中でやりくりするのは大変ではないのか。小学校でも経営評価をしながら聴覚支援学校と歩調を合わせていく必要があるという話をした。交流反省会でも、学習発表会の今後のあり方について話があり、交流というものを考えたとき、大事にしていかなければならないし歴史もある。小学校と聴覚支援学校の宝物であるという確認はしているが、難しい面についてはいい方法をとっていかねばならない。保護者からの体力をつけさせてほしいという要望を考えると、保護者の言い分もあるだろうが、一番は子どもの体力的なもの、子どもの多忙感など、様々な側面から子ども中心に考えた場合、例えば運動させてほしいといったことが本当にできるのか。あるいは交流学习でも小学校に来ていただいていることに対して難しい面はないのか。実情を教えてください。

→<小学部長>多忙感については、学年の反省であがった。精選して充実した交流時間を持つような工夫が必要である。例えば、運動会の踊りの練習は本校で聴覚に配慮しながら徹底的に練習する、全体の歩調を合わせる必要があれば小学校に行く、など内容を確認した上で、思い切って精選していく必要があるということは話題に出ている。具体的な練習内容を相談し合うことが大切であり、全体を見て思い切って精選してやっていきたいと考えている。

体力作りについては、本校児童は通学時に歩いたり荷物を持って来たりということもない。基本的な環境についても課題がある。業間や昼休みにマラソンや縦割り遊びを

していたときもあるが、自由遊びもさせたいという反省もあり、決まった運動は入れていない。できるとすれば決まった時間を確保できる体育の中で、汗をかくくらいの運動を必ず入れるとか、継続して業間マラソンができるような工夫をするなど、善処していきたい。

<D委員>小学校でもマラソン大会の時期に走ることはするが、通年で取り組んではいない。小学校の子どもたちも、車での送迎の子もおり、体力的にすごいというわけではない。歩調を合わせるという意味で、小学校と聴覚支援学校とで連絡調整をして、同じような形での取り組みをすることで本番につながるものが出てくるだろう。運動会の踊りについても同様である。全体が必要な場合は全体で行うとしても、連絡調整をきちんと行うことで、減らせるものは減らしていく方向でよいと思う。

<E委員>肯定的評価が多い中でAが極端に低い項目が若干ある。児童生徒の学習に関わる項目について、学年が上がるに従って評価が下がってきている。何らかの理由があつての結果になっていると思うので、このようなところに注目をしながら学校運営に努めていただきたい。

→<校長>4段階評価でおおむね肯定的評価だがAが少ないというのは大事な指摘である。児童生徒の評価をもらうようになって2年目、子どもたち自身から聞くことが大事であり、継続して聞いていかなければならないと思っている。特に「悩みの相談相手がいない」というのは大事なところである。また、「授業のわかりやすさ」は学校にとって命であり、一番大事なところだと思うので、結果をしっかりと受け止めていきたい。

【提言】

<A委員>子どもたちから意見をもらえるようにしたことはすごいことだと思う。最初の頃は厳しいことを言ったり思ったりするだろうし、どこまで書いていいかわからないところもあると思うが、継続していくことで子どもたちの本音が出てくるだろう。「もっと行事を増やしてほしい」「先生と話すのが楽しい」という記述にあつたように、先生と密に関わることに楽しさを感じている、そのようなところを大事にしていくと、評価が生きてくると思う。

<B委員>地域の施設として今後とも交流を深めていきたい。今年度も施設に来てもらい花植えをしていただいた。写真等も施設の中に飾っており、高齢者にとっては孫のような存在である。こうした交流は特にも認知症の方には効果があるということもあり、今後とも交流を深めていきたい。

<C委員>1年に2回だけの評議員会は少ないと感じる。もう1回ぐらい実施して欲しい。A委員はハローワークの相談員でもあり、みんな仕事のことで悩むと思うので、仕事の情報なども提供して欲しい。

<D委員>小学校でも学校評価を行っているが、肯定的な考えに安心することなく、なぜA評価が少ないのかとか、E委員が言ったことはその通りであり、大事に考えていかなければならないことである。学校評価を違う日にしたら違う結果になるということも考えられる。たまたま保護者あるいは児童生徒がその時にそのように捉えたのかもしれないが、全体を捉えたとき、児童生徒のためになるようなことを第一に考えていきたいものである。指導する上では全共通理解、幼稚部から高等部まであつて難しい面はあると思うが、小学校であれば1年から6年までの過程でも様々な違いがある。それだけの伸び、成長もあるので子どもの実態を考えながら、都南東小学校としてはまた同じよう

な交流を続けて、いろいろな心を磨くための教育のひとつとしたい。

<E委員>公民館でもアンケートをとり、来年度の運営について検討中である。自由記述で正反対の意見もあり調整が大変であるが、どこに視点を置くかで、例えば講座の運営も違ってくる。自由記述を大事にして欲しい。そしてできることはやっていくべきである。

(4) その他

<校長>長時間にわたりありがとうございます。子どもたちは春の顔とこの時期の顔と1年経つと確実に変わります。子どもたちの成長している姿を見るというのが学校としては一番の成果というべきことで、その間に何をしたのが直接効果があったのかなど、なかなか説明が難しいことですが、学校の仕事とはそのようなものであると思います。

今日いただきましたご意見一つ一つ大切なところを教えていただきました。これらのご意見はまたすぐに次の計画を立てる時期がくるので、忘れずに参考にさせていただきます。

4 閉会

